



令和7年12月12日

立川市議会

議長 福島正美 殿

立川市議会文教委員会

委員長 瀬 順 弘

行政視察報告

このことについて、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察月日

令和7年10月16日（木）

2 視察地及び視察事項

視察都市名	視 察 事 項
神奈川県川崎市	自主性・主体性を高めるための体験や遊びの場のあり方について

3 視察の概要及び所感

別紙のとおり

文教委員会視察報告書

【日時】2025年（令和7年）10月16日（木） 10:00～12:00

【視察先】神奈川県川崎市子ども夢パーク（神奈川県川崎市高津区下作延5-30-1）

【視察項目】自主性・主体性を高めるための体験や遊びの場のあり方について

【参加委員】瀬順弘（委員長）、永元香子（副委員長）、中山ひと美、門倉正子、高島奈美、原ゆき

【対応者】認定NPO法人フリースペースたまりば理事長 西野博之様

◆概要・基本情報

- ・施設名：川崎市子ども夢パーク
- ・運営形態：公設民営。運営は「川崎市子ども夢パーク共同運営事業体」
- ・開館時間：午前9時～午後9時（施設点検日年末年始除く）
- ・入場料：無料
- ・来場者数：令和5年度は9月末時点で39,236人

◆ミッション・理念

- ・施設は「子どもの権利条例（川崎市子どもの権利に関する条例）」の理念を具現化する場所として設立されている。
- ・「子どもが自分の責任で自由に遊ぶ」「ありのままの自分でいられる」「つくり続けていく場」などの価値観が柱。
- ・子ども自身が意見を出し、運営に関わる仕組みがある。夢パーク子ども運営委員会など。

◆主な機能・プログラム

夢パークは三本柱で構成されている。

1. プレーパーク（冒険遊び場）

- ・土、水、木材、工具などを使って子どもが自由に遊ぶ場

・月・水・土・日曜日には火や工具を使う遊びも許可されている。

2. 子どもの活動拠点

・スタジオ（音楽／創作）や子ども会議など、子どもが発言・企画参加できる。

・横丁会議（「こどもゆめ横丁」）など、子どもたちが街づくり感覚で関わる。

3. フリースペース「えん」

・学校に行きづらい子どもや若者の居場所。

・自主プログラム制。子どもが自分一日の過ごし方を決める。

・昼食づくり（買い物、調理、片付けなどを子ども主体で実施）を行っている。

◆ 関連活動・住民参画

・支援委員会：地域の大人が支援委員として関わり、「つくりつづける会」などを通じて、定期的に改善議論を行っている。

・子ども会議：川崎市子ども会議が夢パークを拠点に活動。子どもが市政や施設運営に関わる。

・イベント：「こども夢横丁」など、子ども自身が出店や運営を行う。

◆ 特徴

・子どもの主体性が非常に強く尊重されている。禁止事項を極力減らし、「自分で考えて挑戦する場」として機能。

・多様な居場所を提供：遊び（プレーパーク）だけでなく、創作、対話、居場所（えん）など、子どもの多様なニーズに応える。

・地域参加が進んでいる：地域の支援委員・ボランティア、大人も関与し、施設づくり手になっている。

・サステナビリティ教育：解体イベントなどを通じて、リサイクルやものづくりの教育を実践。

・子どもの政策参画：子ども会議を通じて、市政・施設運営への子ども意見が反映される。

◆ 質疑応答のやりとりから

（運営面）

・ケガは日常的に起こるが、スタッフが丁寧にフォローしており、訴訟トラブルはこれまでゼロ。賠償責任保険にも加入している。

・昼食は、当日の朝に子どもが大人と相談してメニューを決定。調理は子ども自身が「自分の責任」で施設のガスを借りて行うという運営。

・食べる・食べないは自由で1食250円。おかわりできる量を確保している。

・就学援助の対象となり、交通費の支給もある。

(「えん」の運営・フリースクールの機能)

・まず保護者説明会への参加が必須で、非常に人気のため定員は早い段階で埋まる傾向にある。

・後日に保護者面談を実施し、体験期間は各家庭で柔軟に設定できる。

・本人が自分の意思で「入りたい」と決めた時点ではじめて入会となる。

◆ 所感

川崎市子ども夢パークを訪れて、まず感じたのは、子どもたちが自分のスペースで安心して過ごせる雰囲気がいっしょにつくられていることだった。子どもの権利条例の理念が、施設の運営に自然に根づいており、遊びの選択や時間の使い方が子ども自身にゆだねられている点が印象的である。

土や水、工具などを使った「冒険的な遊び」が見守りの中で保障されていることで、子どもたちが自分で考え挑戦する姿があり、創造性や自律性を育む環境として非常に優れていると感じた。また、子ども会議や運営への参加の仕組みによって、子ども自身が場づくりに関わる体制が整っている点も大きな特徴である。

地域の大人が支援委員会などで関わり、子どもと大人と一緒に場所を育てていること、さらに家具の解体や再利用といった環境教育が遊びと一体になっていることも魅力的だった。遊びと学びが境界なくつながる姿は、この施設ならではの価値である。

今回の視察を通じて、子どもを中心に据えたまちづくりの重要性を改めて実感した。夢パークで得た示唆は、本市でも有効に生かせるものであり、今後の提案や施策につなげていきたい。